



東京楽所 第20回 雅楽定期公演

「新春の雅楽」

2027年1月24日(日) 14:00開演

第一部 管絃

ひょうしょうねとり

平調音取

さんだ いぎゆう

三台塩急

しょうこん

朗詠 松根

ぼいろ

陪臚

\*

越天楽 秋冬ファンタジー 管絃+ヴァイオリン

廣田真紀(Vn)

第二部 舞楽

らんりょうおう

蘭陵王 左舞 走舞

そりこ

蘇利古 右舞 平舞

\*

ちょうげいし

長慶子

出演 東京楽所



舞楽図 蘇利古

企画 多 忠輝 (宮内庁式部職楽部) プロデュース 野原耕二 (音楽プロデューサー)

主催・お問い合わせ 株式会社AMATI Tel:03-3560-3010 <https://www.amati-tokyo.com>

2026

東京楽所 第19回雅楽定期公演

演奏：東京楽所

新春の雅楽

和琴



お琴のコトは、言葉のこと

神楽舞

千早振るかみの宮居に引く注連の

なかくひさしき御代いのるなり

2026年2月7日(土)14:00開演

サントリーホール 大ホール

主催：株式会社AMATI



AMATI



## 第一部 解説

### かぐらうた にわび 神楽歌 「庭火」

庭火本歌：多 忠純

和琴：多 忠輝

限られた宮中儀式に於いて「神楽歌」、「<sup>にんじょうまい</sup>人長舞」を奏する儀式を「御神楽の儀」と言い、最も神聖な格式の高い歌舞です。

本役＝神迎え、中役＝神遊、後役＝神送りと長時間を要する構成です。

先に「庭火」の独唱（本拍子・末拍子）と和琴のみ伴奏で「御神楽の儀」が始まります。歌詞は古今集採物の歌の一部とされています。

～みやまには あられ ふるらし とやまなる～

### かぐらまい あめのむすび 神楽舞 「天之産」

創作曲・舞：多 忠輝

神楽舞：有馬里佳

～千早振るかみの宮居に引く注連のなかくひさしき御代いのるなり～

この歌は、久留米藩10代藩主有馬頼永公の奥方として、薩摩藩主島津家から嫁がれた有馬晴姫のお歌です。

神様のいらっしゃるお宮に張りめぐらされた長い注連縄のように、平安な世が永く続きますように…という歌意です。

藩邸内にあった水天宮の大神様への敬神の念を詠まれたと伝えられています。現在、この和歌には曲と舞（創作曲・舞：多 忠輝）がつけられ、神楽「天之産」として創作されました。神道において、「産霊」とはすべてのものを「生み」、「生かし」、「育て」、「伸ばす」根源の力とされています。

～水天宮（東京）ブログより～

和琴：多 忠輝 拍子：多 忠純 神楽笛：植原 宏樹 箏：四條 丞慈

付歌：小原 完基 小山 貴紀 平川 幸宗 東儀 季智 樋口 勇一郎

齋木 洸大 笠井 聖秀 野津 輝男 三浦 元則 高多 祥司

瀨瀬 拓也

### 「天之産」舞装束について

「十二単」と呼ばれるその名前から、十二枚重ね着していると思われがちですが、「十二単」は通称で、正しくは「五衣・唐衣・裳」と呼びならわされています。現在では半ひよ（半襦袢）・長ひよ（長襦袢）・小袖の上にはをはき、その上に単・五衣・打衣・表着・唐衣の順に重ね、最後に裳と呼ばれる、裾を長く後方に引いた装束の紐で、全体を結び留めて着ています。

平安の王朝絵巻を思い起こさせるこの装束ですが、平安時代に実際に使われた装束は現在に伝わっておらず、古代から伝えられてきた文献や絵巻物、工芸品などを参考に考証し、復元された姿が現代に伝えられる「十二単」です。十数キロの装束の重さは、装束と共に積み重ねられてきた歴史の重さとも言えましょう。

水天宮江戸鎮座二百年奉祝祭 文：田中 潤博士 華やかな「舞い」の装束より抜粋

### ありま りか 有馬里佳

平成11（1999）年東京生まれ。

旧久留米藩主・旧伯爵有馬家に生まれ、水天宮の宮司を拝命していた父の背中を見て育つ。幼少より茶道・日本舞踊など日本文化に惹かれ、稽古に励み表千家准教授、宗家藤間流師範名取を許される。

平成29（2017）年、神職資格を取得し、学習院大学に通いながら神職の道に進む。令和3（2021）年、水天宮権禰宜を拝命。令和5（2023）年学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻を修了（文学修士）現在、國學院大學大学院文学研究科神道学専攻在籍中。現代の情報社会と神社神道について研究する。

—有馬育英会理事長—



ほくていらく

北庭楽 唐楽 左舞 平舞 四人舞

教訓抄には、宇多天皇紀に不老門の北庭にて創作された。

楽家録に一説として、大国の法にて婚姻の日に、家の北面でこの曲を奏したとある。雅楽が持つ形而上学では、北の方位は格式の高い位置に定められています。古代より遷都、神社仏閣の創建では、北に座して南視する事を建立の基本としています。宇多天皇紀に日本で創作された舞楽、<sup>かさねしょうぞく</sup>襲装束の優雅な舞姿をお楽しみ下さい。

舞人 岩波 孝昌、増山 誠一、平川 幸宗、東儀 季智

ちょうぼうらく

長保楽 高麗楽 右舞 平舞 四人舞

一条天皇紀、長保年間に伝来した曲名、破=ほそろくせり、高麗巻越調と急=かりやす、高麗平調の二曲を合わせて一曲とし年号を曲名とした。<sup>ばんえいしょうぞく</sup>蛮絵装束、<sup>ほろ</sup>袍=うえのきぬ、装束の一番上に着る袍の袖に、相對する唐獅子の刺繍が施され、舞様に揺れる唐獅子の姿から、遠国との古代文化交流のあり様を彷彿致します。

舞人 松井北斗、小山 貴紀、齊木 洸大、瀨瀬 拓也

管方

鞆鼓、三ノ鼓 楠 義雄 太鼓、高多 祥司 鉦鼓 清田 裕美子

鳳笙 小原 完基、樋口 勇一郎、野津 輝男、八槻 純子

箏 久恒 壮太郎、四條 丞慈、新谷 恵、三浦 元則

横笛 上 研司、植原 宏樹、笠井 聖秀、西谷 亜矢子

東京楽所 代表：多 忠輝

1978年、当時の宮内庁式部職楽部長多忠麿、同楽部員東儀兼彦、芝祐靖、国立劇場演出室長木戸敏郎各氏4名が、発起人となり「東京楽所」を創設。有職としての儀式音楽だけではなく、広く音楽芸術としての雅楽演奏を目的として結成された。累代の楽人に併せて、民間の優秀な雅楽奏者も含め、古典から現代音楽まで幅広く展開する高い芸術性を有する雅楽団体である。又、日本雅楽を継承する優れた楽師の育成の一端を担うことも東京楽所の目的としている。現在、わが国最大規模であり、日本雅楽を未来へ継承する演奏団体です。株式会社AMATI所属団体。

1978年以来、数多くの雅楽公演に参加、高い評価を得る

1983年、外務省招請により文化使節としてヨーロッパ公演

1986年、エジプト・カイロ公演

1987年、米国において日本伝統使節団に参加

2005年、日・EU市民交流年事業ベルリン、ロンドン大学公演

2008年、日本/ブラジル交流年舞楽法会五都市公演

2009年、井上道義指揮、オーケストラ アンサンブル金沢とウィーン、ブタペスト公演共演

2011年、日独交流年ドイツ国5公演ツアーなど世界的な活動を展開している

2012年より、東京オペラシティ コンサートホールで「新春の雅楽」「七夕の雅楽」年2回の雅楽定期公演を開催（主催：株式会社AMATI）

2017年、アジアで初めて開催された「第20回 国際音楽学会東京大会」オープニングコンサート雅楽公演。その模様はクラシカ・ジャパンで初めて雅楽を取り上げ、2018年「新春の雅楽」として放映

2018年 東京楽所 第11回雅楽定期公演からサントリーホールに会場を移し年1回開催。（主催：株式会社AMATI）

12月 外務省事業「ロシアにおける日本年」東京楽所 雅楽ロシア公演ツアーモスクワ市、サンクトペテルブルグ市四公演。

10数枚のCDを制作出版し、雅楽の普及にも努めている。